

平成23年度  
発生予察情報

## 特殊報第3号

平成23年12月19日  
埼玉県病害虫防除所  
(TEL:048-525-0747)

### ムギ類黒節病の発生について

県内の大麦及び小麦において、葉身や葉鞘に黒褐色～褐色の病斑を生じたり、正常に出穂しない生育障害が発生し、埼玉県農林総合研究センターで原因を調査したところ、ムギ類黒節病による被害と判明しました。  
本県における本病の発生確認はこれが初めてです。

\* 特殊報：新奇な有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

#### 1 病害虫名 ムギ類黒節病

#### 2 発生経過

- (1) 平成22年3～5月、農林総合研究センター（以下「農総研」という）内ほ場において栽培中の大麦及び小麦で、葉身に黒褐色で紡錘形ないし不整形の病斑を生じたり、葉鞘に褐色の病斑を生じる様子が見られた。小麦では穂の出すくみや穂枯れ症状も認められた。
- (2) 平成23年4月、農総研所内ほ場及び県北部の生産ほ場の大麦において、前年同様に葉身や葉鞘に黒褐色ないし褐色の病斑を生じたり、茎立期後の生育抑制を生じる株が散見された。
- (3) これらの発病株を農総研病害虫防除技術担当で検査した結果、本病はムギ類黒節病であると判断された。
- (4) 我が国における本病の発生は、昭和12年頃初めて島根県で確認され、その後関東地域でも報告されているが、本県での発生報告は今回が初めてである。

#### 3 病徴

- (1) 3～4月にかけて、葉身や中肋に黒褐色～褐色の病斑を生じる（写真1）。
- (2) 病勢が進展した場合、生育抑制が生じる場合もある（写真2）。節の部分が褐変（写真3）し、これが黒節病の病名の由来である。
- (3) 葉鞘にも不整形で褐色の病斑を生じる。小麦では、止葉の葉鞘に発生したのち穂の出すくみを生じる場合もある（写真3）。
- (4) 穂が侵された場合には穂枯れ症状や穂焼け症状となる（写真4）。



写真1 被害株（大麦）



写真2 生育抑制（大麦）



写真3 葉鞘の病斑（小麦）



写真4 穂焼け症状（大麦）

#### 4 病原菌の特徴と発生生態

- (1) 病原菌は細菌の一種で、生育適温は25℃前後であるが、発病好適条件は低温多湿である。
- (2) 本細菌は乾燥に強く、種子に付着して生残り次作の伝染源となる。また、罹病残渣や土壌中で生残り伝染源となる可能性がある。

#### 5 防除対策

- (1) 本病に対する登録薬剤はないため、予防に重点を置き、早期発見と被害株除去に努める。
- (2) 種子伝染するため、健全種子を使用する。

- (3) 早播すると多発する傾向にあるので、適期に播種をする。
- (4) 多肥条件や初期生育が旺盛な場合は発病が多くなる傾向にあるので、適正な生育量を保つ。
- (5) 被害ワラは、ほ場の周辺に放置せず処分する。
- (6) 冬季に寒害を受けた後、定期的な降雨や降雪がある年次に発生しやすい傾向がある。暖冬で軟弱気味に生育した後、このような気象条件に遭遇した場合は要注意である。

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍率は使用の都度確認する。特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬の選定に当たっては、系統の異なる薬剤を交互に散布する。
- 4 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。